

## 書評

### **Calestous Juma, 2011, New Harvest: Agricultural Innovation in Africa, Oxford University Press,**

堀内 伸介  
(社)アフリカ協会理事

本書で成功例として詳しく取り上げられている 2005 年のマラウイは、人口の半分以上は一日 1 ドルで生活し、4 分の一は毎日必要な食料をとる事が出来なかった。また、労働人口の 78%は農業に従事をしており、その半分以上が必要最低限の食糧をも生産できないでいる。メイズがマラウイの主食であり、主要栄養源である。しかし、雨水の不足、土地の疲労、不十分な投資、古い技術等々が重なり、2005 年のメイズの生産量は総需要の半分であり、価格も高騰し、5 百万人が食料援助に依存せざるを得なかった。ムサリカ大統領は農業相を兼任し、食糧自給を目標に大胆な政策転換を行なった。予算の 16%を農業への支出し、良い種子と肥料を輸入し、農民に補助金（クーポン制）を与えた。市場メカニズムを主張する援助機関 IMF, USAID などは農民への補助金に反対した。新政策は民間部門を巻き込み、農民に技術訓練を施し、灌漑や収穫後の支援などを含む多様な農業保護施策を強硬に進めた。その結果、2005-06 年にはメイズの生産は倍増し、2006-07 年には史上最高の収穫を上げ、近隣諸国への輸出を始めるほどであった。食料価格は 50%も下落した。2010 年には大統領は農業相を譲った。

著者の提案する新しい農業のあり方がこの例に凝縮している。第一に農業改革を推進するためには、政府トップのコミットメントが必須である。本書に提案されている改革は、アフリカの伝統的な農業と援助国が提案している施策をはるかに超えるスケールであり、強い政治的な意志と実施する能力が必要となる。第二に農業開発を経済開発の中心に置く。途上国の近代化、経済開発を進めるに当たって、暗黙の了解とも言うべきものは工業化であり、農業を経済開発の中心に置く発想は、大規模商業用作物生産の例外を除いて、少なかった。農業部門は工業化を支援する労働者、作物、食料などのインプットの提供部門と考えられてきた。サブサハラ・アフリカでは約 70%の人口が農業部門に属する事を考えれば、この部門からの他の部門への生産要素の移転は必ずしも適切のものではなかったかもしれない。ましてや貧困が大問題であるサブサハラ・アフリカにおいては、農業部門の開発こそ貧困削減、人間開発、食料安全保障にも直結するものである。

第三に著者は農業の Innovation System—総合的な開発システムを提案している。このシステムの基本的な考え方は、農業問題の解を農業の中に求めるのではなく、農業の外に農業の発展を阻害している問題を見つけてゆくと言う姿勢と理解する。換言すれば、社会システム全体の問題と捉えている。「多くのアフリカ諸国は個々には成長可能な国家ではない。」(p. 169) と厳しい評価をし、地域協力、地域市場の育成を強調する。ローカルの必要とする技術の開発を大学を含めた研究普及、教育機関の中心課題とする。農民、特に女性の技術の向上を強調する。小さな畑での女性による食料生産がアフリカの主な生産であることの再認識である。小農の生産性を上昇させるインフラを中心として、次第に地域全体のインフラ

の整備へと進む。民間部門の積極的な参加を支援する。種子の生産から始まり、生産物の加工、販売、輸出へ可能性を伸ばしてゆく。種子の生産、生産物の加工は市場機構を利用してクラスターアプローチを進めている。最後に政府の革新的な政策、財政支援が必要な事は言うまでもない。

著者のジュマ教授(ケニア出身)の指摘は、新しい展開をアフリカの農業開発に持ち込み画期的である。しかし、大きな課題は彼の指摘するようなビジョンと実施能力を持った政治指導者が常に選ばれて登壇するシステムが多くの国に欠けていることである。